The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Lokappadīpakasāra（世間灯明精要）の研究序

CHAITONGDI Phrachatpong

1．はじめに

須弥山を中心とした世界観あるいは歴史的宇宙論については，「世記経」「大樓炭経」「起世経」「起世因本経」や『婆沙論』『倶舎論』などの仏教サンスクリット文献や仏教漢訳聖典の中に体系的な記述が見られる．一方，パーリ聖典においては，*Aggañña-sutta*, *Cūḷanikā-sutta*, *Sattasūriya-sutta* 等の経典名が挙げられる．しかし，いずれにしても，天界から地獄までの宇宙の構造と，それらが成立して破壊するまでの経過は，前者の漢文文献ほど詳しく説かれていない．それらをより詳細に述べたパーリ文献には，仏音等の諸註釈があり，いずれも5世紀頃の註釈文献の時代に成立した[1]．しかし，それらの記述は註釈文献の中に散在するばかりで，体系的にまとめられたものではない．筆者が調査した結果，体系的世界観を説いたパーリ文献が記述し始められたのは，11世紀以降である[2]．それらの文献の内，14世紀に成立した *Lokappadīpakasāra*（以下〈Lps〉と略す）は，セイロン・ビルマ・タイに最も広く伝承され，多くの貝葉写本が現存し，後世に成立した体系的世界観の文献の中では，代表的な文献と言ってもよい．それにもかかわらず，Lps は学界において殆ど研究されていない．そこで本稿では，その研究の経過報告として，Lps の構成と内容の検討を行なうこととする．

2．Lps について

Lps は，膨大な南伝パーリ文献（パーリ三蔵，*Mahāvaṃsa*, *Sīhalavatthupakaraṇa*, *Milindapañhā*,『清浄道論』，註釈文献，復註釈書など）の中から，地獄から天界までの生物の世界（有情世間）と歴史的宇宙論・地理的世界観（器世間）などを収録し，それらを整理・解釈・体系化したパーリ文献である．Lps の著者の名前は，本書の跋文から，ビルマにおいて14世紀に活躍していた Medhaṅkara 僧王と知られる．そして後代になってセイロン・タイに伝わり，他の体系的世界観を説く文献に多

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

大な影響を与えたのである[3]．

3．Lpsの研究状況

セイロンでは，1928年に，Haburugala Piyaratana氏によって，シンハラ文字版が校訂出版された．タイでは，多くの貝葉写本が現存し，1980年にタイ語に訳出され，部分的に研究が行われた．しかし，いずれの研究も，写本間の異読を調査しただけであり，その中味，つまり，本書の諸引用文献や著者の解釈の典拠などについては，ほとんど解明されていない．ヨーロッパにおいては，何人かのパーリ学者によって目録などで紹介され[4]，日本においては橘堂正弘博士によって，本書の第三章（餓鬼趣の解説），第五章（人間趣の解説）と第六章（天界趣の解説）の一部が *Sīhalavatthupakaraṇa* というセイロンの仏教説話集から引用されたことが発表されたもの以外，他の研究はない[5]．

4．Lpsの構成と内容の概説

作者が本書を著した意図は，本書の冒頭の記述から行世間（Saṅkhāraloka），有情世間（Sattaloka），器世間（Okāsaloka）という三つの世間[6]を解説することにあると知られる．そのため，Lpsの構成は，八章をもって上記のような三つの世間をテーマに組織される．全八章の内容を要約して紹介すれば次のようになる．

第一章「行世間の解説」は韻文と散文で記されており，その冒頭は，Vis pp.204-205の行世間の分類解説とほぼ同文である．それに続いて，それぞれの行世間の分類をより詳細に説明する．

第二章「地獄趣の解説」は全体が韻文からなり，その内容を四段階に分けて説明している．1）その冒頭は後続の第二章から第五章までの導入部であり，有情世間は二種から五種までに分類されると述べている．2）八大地獄の名が列挙され，それぞれの大地獄には，十六小地獄が付随していると述べられ，八大地獄の共通点が説かれている．3）それぞれの地獄における亡者の寿命．4）犯した悪業の種類によって，八大地獄のいずれかに堕ちるべきことが詳述されている．しかし，ここには，それぞれの地獄の位置は明示されていない．

第三章「餓鬼趣の解説」も全体が韻文であり，餓鬼の苦しみを冒頭に述べている．次に，七つの物語が挙げられ，餓鬼たちによって前生において行われた餓鬼という状態を作り出す業と，彼らのそれぞれの餓鬼としての果報の違いを一つ一つ明確に示している．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

第四章「畜生趣の解説」は全体が韻文の形式で，第三章の構成と同様に，畜生の種類とその苦しみを冒頭に説いている．そして，繰り返し，足の無い動物や二足の動物や四足の動物などのそれぞれの種類に属する動物の実態をより詳細に説明してある．

第二章から第四章までのいずれの章末にも，上記のような悪趣に堕ちないように，三つの善業や法を行うべきであると勧められている．

第五章「人間趣の解説」は，韻文で著され，章の冒頭として manussa という言葉の解釈がなされ，次いで人間の二種から四種までの分類について説かれている．さらに四種の人間（ヴァルナ）の内，王族の人たちについて詳しく述べるために，釈尊在世時代の王族の系譜を取り上げ，続きとして，*Mahāvaṃsa* の多くの記述からセイロンの王族に関することを引用しつつ詳述している．最後の物語として，北クル洲の人たちの様相と四州の人たちの寿命が略述されている．

第六章「天界の解説」は全体が韻文で叙述され，その記述内容によって，四段階に分けられる．1）deva の解釈と天の種類．2）いくつかの物語を挙げ，天人によって前生において行われた業と，六欲天における天人の生活の実態が詳述されている．3）六欲天界に属する天人の寿命．4）十六色界と四無色界の名が列挙され，それぞれの天界における天の寿命や達せられた禅定について説明されている．

第七章「器世間の解説」は韻文と散文で著され，その内容は五段階に分けて説明されていると考えられる．1）本章の冒頭では，鉄囲山の規模と，壊［劫］・壊住［劫］・成［劫］・成住［劫］について述べ，更に壊劫の三つの原因（三災）即ち，火と水と風による壊を細かく記している．2）再び世界を囲む鉄囲山の様相を述べ，一世界について，風・水・地から須弥山を経て，その世界の中心となる須弥山と七つの輪山の有様が詳述されている．次いで，須弥山の四方に位置する四洲の中で，ジャンブ洲の有様を最も詳しく記述している．3）月と太陽の大きさとそれぞれの運行が詳述される．4）三十三天とアスラとの戦いの由来を詳しく述べている．5）三十三天とアスラの世界が須弥山の全体の長さと同様の距離があることから関連して，第四無色界までの，それぞれの天界の距離を一つ一つ明示している．これについては，それ以前に成立した文献に見られない本書の特徴であろう．

第八章「雑論の仕方による［教説の］精要の解説」は全体が韻文の形をとり，*Sārasaṅgaha* を模範とし，パーリ三蔵，*Milindapañhā*，註釈文献などから抽出した

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

教義集成である．

5．おわりに

以上のように，Lps がパーリ仏教の世界観を体系的に説いた文献として極めて重要であることが分かる．Lps は行世間，有情世間，器世間という三つの世間を説明することによって組織され，それ以前に成立した多くのパーリ文献の記述を引用したほか，それらを整理・解釈・体系化したものといえる．今後，諸引用文献の調査をすすめ，その源泉資料を遡ることによって，本書の成立の状況と，他のパーリ文献の世界観の成立過程を明らかにすることができると期待される．なお，その源泉資料と，サンスクリット文献や漢訳聖典の世界観記述とがどのように関係しているかも，今後の課題である．

1）註釈文献の時代という時代的区画は，水野弘元博士の説に従う．（水野弘元『パーリ佛教を中心とした佛教の心識論』，山喜房佛書林，1964, pp.25-28）須弥山を中心とする世界の形状について：Vis pp.205.20-206.11, Smp p.100.2-18, SA vol.II p.157.4-15, SnA vol.II pp.442.18-443.7 に見られ，世界の生成と消滅について：Vis pp.414.9-422.29, PṭsA pp.367.13-374.36 に見出せる．

2）成立順に紹介すれば，次のようになる．1.*Lokapaññatti*, 2.*Lokuppatti*, 3.*Lokappadīpakasāra*, 4.*Cakkavāḷadīpanī*, 5.*Mahākappalokasaṇthānapaññatti*, 6.*Lokadīpanī*, 7.*Okāsalokadīpanī*, 8.*Lokasaṇthānajotaratanakaṇthī*

3）*Cakkavāḷadīpanī* において Lps から引用した記述がしばしば明示され，*Lokasaṇthānajotaratanakaṇthī* も Lps と同じパターンで述作されたことから，Lps は，それらの文献に大きな影響を与えたことが分かる．

4）Wilhelm Geiger, *Pāli Literature and Language*, 1937, p.45, Meble Haynes Bode, Index to The Gandhavaṃsa, *Journal of Pali Text Society*, Ed.by Rhys Davids, Vol.IV, 1896, p.75, Meble Haynes Bode, *The Pāli Literature of Burma*, 1966, pp.35-36, Oskar von Hinüber, *A Handbook of Pāli Literature*, 1996, p.397

5）橘堂正弘「Sīhalavatthupakaraṇa と Lokappadīpakasāra」『印度学仏教学研究』19-2 (38), 1971, pp.330-331

6）このような世間の分類が Vis p.204, Smp vol.I, p.118, DA vol.I, p.173 などにみられる．器世間という原語については，『倶舎論』では，bhājanaloka になっているが，パーリ文献には okāsaloka という表現が使われている．

〈キーワード〉 世界観，宇宙論，須弥山

（東洋大学大学院）

NII-Electronic Library Service